



Title	擬似独話の使用からみるほのめかし：行為要求場面を対象に
Author(s)	頼, 俊雯
Citation	日本語・日本文化研究. 2021, 31, p. 132-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

擬似独話の使用からみるほのめかし —行為要求場面を対象に—

頼俊雯

1.はじめに

西光(2010)によると、ひとは無意識のうちに独り言を言っている。電話をかけているけど向こうはなかなか出ないとき、「なんで電話に出ないのよ。」と言うことや、化粧が終わったときに女性が鏡を見て「よし」と言うことなど、こうした独り言はコミュニケーションの役割を果たしていないと言われる。しかし、聞き手となりうる人物が存在する場面において、その人に対して話し手が何かをしてもらいたい際に、直接的に依頼を口にするのではなく、独話のように発言することがある。例えば、近くにいる人に部屋の窓を開けてもらおうという意図を持って、「暑いなあ…」のように「独り言」を言ったとしよう。この発話は相手になにかしてほしいことをほのめかすことがあり、その場合はコミュニケーションの機能を持つと言える。

このように、形式上は独話であるにも関わらず、聞き手の存在を意識して、聞き手に働きかけていることをほのめかす言語行動が日常生活では時に見られる。日常生活において、独話によるほのめかしはどのようなものがあるのだろうか、また、対話式の発話ではなく、なぜ独話が使われるのだろうか。

野田(2006)は、聞き手となりうる人物の存在を意識したうえで、独話であるかのように発話されたものを「擬似独話」と呼んでいる。本稿では、この擬似独話を利用したほのめかしに着目し、依頼や要求などの行為要求場面¹⁾における擬似独話によるほのめかしの種類及び特徴を明らかにする。その上で、擬似独話によるほのめかしと対話によるほのめかしを比較し、その相違点を考察する。最後に、人が擬似独話によるほのめかしを理解できる理由を探る。

2.先行研究及びその問題点

本章では、ほのめかし及び依頼、そして、独話に関する先行研究を概観する。

2.1 ほのめかし及び依頼について

蒲谷・川口・坂本(1993)は、依頼表現を「自己の実現したい事柄を他者の好意による行動によって叶えられるよう働きかける表現行為」と定義づけている。そして、Fukushima(2000)は、ポライトネス理論を基に、依頼表現を「直接度」という点から3分類した。(訳は筆者による。)

- a. 直接的依頼：「窓を開ける。」「窓を開けてよ。」「窓を開けてください。」
- b. 間接的依頼：「窓を開けてくれない？」

c. ほのめかし：「暑いね。」「その窓、開く？」「ここ、エアコンないのかな。」

Brown & Levinson (1987)によれば、依頼する話し手は、特定の行為を要求することによって、聞き手に時間や労力などの多少の負担をかけるため、聞き手のネガティブ・フェイス²を脅かしていることになる。それゆえ、依頼である話し手はそのフェイス侵害を避けるための方策（ストラテジー）を採ることがある。その一つが、「オフ・レコード (off record)」と呼ばれるものである。Brown & Levinson (1987)は「オフ・レコード」を以下のように定義づけた。

ある伝達行為が、単一の明快な伝達意図によるものとして捉えることができないような形でなされる場合、行為者が自分の行為を弁護できるような解釈をいくつか用意することで、自らに「逃げ道」を残している場合、それをオフ・レコードと呼ぶ。
(訳は田中他 2011)

滝浦 (2008) は「off record」に「ほのめかし」という日本語をあて、「ほのめかしストラテジー」について次のように述べている。

暑くて部屋の窓を開けてほしいと思っている人が「暑いね」とだけ言って周囲の反応を見ている場合。このように、事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するストラテジーが「ほのめかし (off record)」ストラテジーである。

以上のように、依頼や要求などは聞き手に負担をかけるため、依頼者は被依頼者と円滑な人間関係を保つために、被依頼者の負担を軽減する努力を行っている。依頼に内容を明示的に含む間接的依頼だけでなく、何らかのストラテジーを使用することで、依頼や要求を暗示的にほのめかすこともそのような手段の一つである。

2.2 独話について

野田(2006)によれば、話し言葉においては、聞き手を意識して発話が行われるのが普通であるが、その一方で、聞き手の存在を全く意識しない発話もある。前者は「対話」、そして、後者は「独話」と呼ばれている。両者の違いは、聞き手に向けた発話であるか否かという点である。対話と独話の間に存在する「擬似独話」と呼ばれるものもある。擬似独話とは、聞き手となりうる人物の存在を意識した上で、独話であるかのように発話されたものである。

また、野田(2006)によれば、擬似独話は、擬似性が弱いもの、中間的なもの、強いものに分けられる。擬似性の弱い擬似独話とは、思考・情報処理過程や心情をそのままの形で発話

したものである。(弱い擬似独話は独話と近い発話だと言えるが、独話とは異なる。)

例：ちどり「演説ぐらい出来ますよ。女優ですからね」

富子「ぜひお願いします」

藤村「楽しみだなあ。ひとつ名調子でバンバンやってください。うちの清川はきまじめで、どうしても演説が固いんですよ。」 (ジェームス三木「善人の条件」p.71)

擬似性の強さが中間的な擬似独話とは、心情などを独話的に表現しながら、それを聞き手に認識させようという意図があるものである。このタイプの擬似独話には、聞き手に間接的に行為を促すものがある。

例：07E 男 前回の、版下見ます。

07A 男 あっ、てゆうか、あれが欲しいなあ。

07E 男 元のやつ

(現代日本語研究会(編)(2002))

また、擬似性が強い擬似独話は聞き手を非難する擬似独話である。

例：智也「俺、来週から二年間インドなんだ。帰るまで考えといてくれないか」

実加「また婚約の話ね」

智也「またひどいなあ。真剣なんだぞ。」

(桂千穂「ふたり」p.111)

2.3 先行研究の問題点及び本研究で扱う擬似独話

従来のほのめかしに関する研究では、それが対話形式であるか、それとも、独話形式であるかに焦点を当てたものはない。野田(2006)では、擬似独話には聞き手に間接的に行為を促すものがあると指摘されているが、具体的にどのようなものがあるのかどのような特徴を持つのかについて詳しくは言及されていない。また、人はなぜ擬似独話による間接発話行為を理解できるのか、その理由については触れられていない。

野田(2006)を基に、「対話」、「独話」、「擬似独話」、「擬似独話によるほのめかし」の特徴をまとめると、表1のようになる。

表 1

	聞き手を意識した上で発話しているか	文体(文末)	聞き手目当ての形式 ³ であるか	聞き手に働きかける発話意図があるか
対話	○	常体または敬体	○	○
独話	×	常体	×	×
擬似独話	○	常体	×	○

したがって、本稿で対象とする「擬似独話による依頼・要求のほのめかし」は以下のように定義づけられる。

形式上は常体で、聞き手目当ての形式を取っていないが、聞き手の存在を意識し、依頼・要求の意図がある発話。

以下、第3章では終助詞「なあ」による擬似独話、第4章では擬似独話によるほのめかしと対話形式によるほのめかし、第5章では中国語における擬似独話によるほのめかし、そして、第6章では人はなぜ擬似独話によるほのめかしを理解できるのかを順に考察していく。

3.終助詞「なあ」による擬似独話

森山(1997)は終助詞「なあ」がつくと、独話として解釈されやすくなると指摘している。本稿では、終助詞「なあ」を独話を判断する重要な手がかりとし、「なあ」⁴のある擬似独話を中心に分析する。また、筆者が行った聞き取り調査においては、「なあ」を長めの下降調で発音する被調査者がほとんどであった。

終助詞「なあ」を伴う擬似独話が依頼のほのめかしとして用いられているものを分析した結果、その意味内容によって二つに分けられることが明らかになった。

- i. 「話者の感情/感覚-なあ」
- ii. 「話者の身の回りのこと-なあ」

また、擬似独話の言語形式に目を向けると、「意志形-かな」によるほのめかしもよく見られる。本稿ではこれも研究対象の一つとして考察する。

iii. 「意志形-かな (あ)」

以下、これら3種の擬似独話を順に考察していく。

3.1 「話者の感情/感覚-なあ」によるほのめかし

「なあ」を伴う擬似独話のほのめかしにおいて、「話者の感情/感覚-なあ」が多く見られる。以下の例を見よう。

近くにいる人に窓を開けてほしいとき：

(1) 「暑いなあ。」⁵

(c.i. 窓を開けてください。)

c.i. conversational implication(会話含意)

長居している友達に帰ってほしいとき：

(2) 「眠いなあ。」

(c.i. 帰ってください。)

コンビニに行こうとしている友人や家族にお菓子を買ってきてほしいとき：

(3)「甘いもの食べたいなあ。」

(c.i. コンビニで何かお菓子を買ってきてください。)

(1)～(3)の発話は、終助詞「なあ」を伴わず、「話者の感情/感覚」の部分のみ、すなわち、「暑い」、「眠い」「甘いもの食べたい」だけでも独話として使われる。日本語では多くの形容詞、とくに感覚・感情を表す形容詞はそれだけで感嘆の叫びになる(中川 2005)。

例のように、話者の感情/感覚は主に形容詞(「暑い」、「眠い」など)で表される。その意味内容を分析すると、話し手が自分の負の状況(困っていること)を描写したり(例(1)(2))、話者の希望や願望について言及したり(例(3))するものが多い。

依頼において、話し手(依頼する人)が望ましくない事態に置かれていて、その事態を改善するために聞き手(依頼される人)にある行為を頼むという場面は多い。聞き手が負の状況を改善する能力を有している(と話し手が想定する)場合、話し手が負の状況を語ることで、聞き手にその負の状況を改善・解決してほしいとほのめかす。希望・願望表現「-たい」が使用されるのは、話し手の現在の状態が、その欲求・希望が満たされていない状態だからである。心の中にある自分の希望・欲求を聞き手がいる前で声に出して発言することは、「自分ではそれを叶えることができない・難しいので、聞き手にある行為を行ってほしい」とほのめかすことに繋がる。

では、このような意味内容を備えた擬似独話において、「なあ」はどのような役割を果たしているのだろうか。すなわち、ほのめかしとしての使用にどのように貢献しているのだろうか。森山(1997)は、「なあ」は話し手の意識の中で、一定の時間をかけつつ、その内容が焦点化されてくるという機能を持つと指摘している。これは、単なる瞬間的な感情露出の独話ではなく、その内容に至るまで関連する諸事情を考えての発言であることを「なあ」は示唆できるということである。その諸事情の一つとして依頼の意図をほのめかすということも含まれる。それゆえ、「なあ」を伴う発話は擬似独話として用いられやすい。さらに、話し手が自分の負の状況や、希望・願望について言及することによって、聞き手がほのめかされた依頼・要求を察することを期待することができる。したがって、「話者の感情・感覚」を話し手が他者に伝えたい場合、特に話し手が負の状況を改善したい場合や、何らかの希望を抱いている場合、その言及に終助詞「なあ」が伴うと、ほのめかしの機能が強く働くとと言える。

3.2 「話者の事情(身の回りこと)-なあ」によるほのめかし

次に、以下のような擬似独話について考察してみたい。

親に仕送りしてもらいたいとき：

(4) 「最近お金ないなあ。」

(c.i. 最近お金ないから、仕送りしてください。)

貸したお金を返してくれない友達の前で：

(5) 「生活費が今月かなり厳しいなあ。」

(c.i. 生活費が今月かなり厳しいから、貸したお金を返してください。)

長居している友達に帰ってほしいとき：

(6) 「あー眠い、眠くて死にそうだなあ。明日も仕事早いし、最悪。」

(c.i. 帰ってください。)

上記の例は、話者の事情(身の回りのこと)を擬似独話として述べ、依頼や要求をほのめかしている。「話者の感情/感覚」の場合と同様、その発言内容は話者にとって負の状況であるものが多い。前節で考察したように、話し手が負の状況を聞き手が存在する前で発話することは、聞き手に改善・解決してほしいことをほのめかすことに繋がる。

終助詞「なあ」は話し手の意識の中で、一定の時間をかけつつ、その内容が焦点化されてくるという機能を持つ(森山 1997)。前節で述べたように、「なあ」は、その前の内容を焦点化するため、単なる瞬間的な感情の発露ではないことを示唆する。すなわち、話し手が思った内容をそのまま発声したというだけではなく、そこに何らかの意図を含めている可能性が高い。それゆえ、依頼の意図をほのめかす際に、「なあ」を伴う擬似独話が用いられやすい。「話者の事情(身の回りのこと)」に「なあ」を伴うと、独話という形式でありながら、聞き手に話し手自身の事情を意図的に伝達しようとしている。そして、話し手が聞き手にその事情(負の状況)を察することを期待し、改善することを求めているというほのめかしが生じる。それゆえ、「話者の事情(身の回りのこと)」に終助詞「なあ」を伴う場合、ほのめかしの機能が強く働く。

3.3 「意志形-かな」によるほのめかし

3.1 と 3.2 では、「なあ」によるほのめかしについて考察した。本節では、「意志形-かな」によるほのめかしを見ていく。

長居している友達に帰ってほしいとき：

(7) 「明日仕事あるしそろそろ寝る準備しようかな。」

(c.i. 帰ってください。)

親に仕送りしてもらいたいとき：

(8)「最近、出費がすごく多いわ。どうしようかな。」

(c.i. 仕送りしてください。)

三宅(2000)は、「かな」の本質的な意味は「疑問内容を検討中であることの表明」であると論じている。通常の質問文とは異なり、聞き手への直接的な回答の要求ではないという。宮崎(2002)は、疑いが話し手にとどまるため独話的用法が「かな」の基本であると述べている。

本来「話者の動作-しようかなあ」は話者がその動作をするかどうか、実行していいのかどうかを検討中である・迷っているという思考を口に出すものである。例(7)「明日仕事あるしそろそろ寝る準備しようかな。」は、話し手にはそのような迷いが実際にはなく、「明日仕事あるし、帰ってもらって、そろそろ寝る準備をしたい」という発話意図がある。聞き手は話し手のそういう意図を察した上で、自発的に「じゃあ、帰るね」と発言する。このように、「意志形-かな」を使うことで、依頼・要求の意図をほのめかしている。

例(8)は話し手がある負の事情(出費がすごく多いこと)を描写してから、「どうしようかな」という疑問を提示するものである。話し手は「最近、出費がすごく多いわ。どうしようかな。親に仕送りしてもらったら解決できる」のように、話し手の心の中の解決策を口に出さず、文末に独話の「どうしようかな」を使用することで、聞き手から自発的な「じゃ、お金を送るよ」という返答を期待している。

依頼のほのめかしの場面において、「意志形-かな」は、見かけ上は話者がある動作をするかどうか、実行していいのかどうかを迷っているという思考を口に出しているように聞こえる。しかし、実は話し手の心の中にすでに解決策があり、その「答え」を聞き手から提案されるのを期待しており、聞き手にその動作を実行してほしいとほのめかしている。

4.擬似独話によるほのめかしと対話形式によるほのめかし

前章では、擬似独話によるほのめかしは「話者の感情/感覚-なあ」、「話者の事情(身の回りのこと)-なあ」、「意志形-かな」という3種類があると述べた。本章では、それぞれの擬似独話によるほのめかしの表現が、同様の意図をもつ対話形式のほのめかし表現に「変換」すると、どのような言語形式になるのかを考えるとともに、独話形式と対話形式とではどのような相違点があるかを見ていく。

4.1「話者の感情/感覚」による対話形式

すでに指摘したように、依頼・要求の場面において、話し手が望ましくない事態に置かれていることがよくある。これは、話し手はその事態を改善したいと思っているが、自分ではそれができず(または、自分の代わりに)聞き手に改善してもらおうと依頼・要求することが背景にある。もし聞き手が話し手と同じ環境にいる、あるいは同じ感情/感覚を持

つなら、聞き手もその改善を望んでいるはずで、聞き手がその改善行為を行うことは、自然の成り行きであると話し手が想定する。そのため、依頼をほのめかす際に、〈同意・共感を求める〉ことは重要なストラテジーの一つとして使われる。よって、話し手がある感情/感覚を聞き手に向け発話する際に、同意を求める言語形式をとることが可能である。以下の例をみよう。

(1) 「暑いなあ。」 (再掲)

→(1a) 「暑くない？」

(1b) 「暑いね。」

(2) 「眠いなあ。」 (再掲)

→(2a) 「眠くない？」

(2b) 「眠いね。」

(3) 「甘いもの食べたいなあ。」 (再掲)

→ (3a) 「甘いもの食べたくない？」

(3b) 「甘いもの食べたいね。」

上記の例のように、擬似独話によるほのめかしと同様の依頼の意図を対話形式である否定疑問文、あるいは、終助詞「ね」によって言い表すことができる。

否定疑問文には、話し手の認識を聞き手に押し付けて確認させる、確認要求表現としての用法(宮崎 2005)や自分もそうだということを前提として聞き手も同じかどうかを確認しようとする用法(日本語記述文法研究会編 2003)がある。また、「ね」は、話し手と聞き手の情報が一致するという話し手の想定を表し(森山 1989、益岡 1991 等)、田窪・金水(1996)は、「ね」と「なあ」の機能はほとんど同じで、「ね」は対話用法に限定され、「なあ」は独話にも使用できるという点で違っていると述べている。

すなわち、対話形式の否定疑問文や「話者の感情-ね」はいずれも聞き手の同意・同調を求めるというストラテジーを利用することで、聞き手に依頼や要求の意図をほのめかすことを実現させている。

4.2 「話者の事情(身の回りのこと)」による対話形式

話者の事情(身の回りのこと)は、通常、聞き手にとっては事前に知らないこと、いわゆる新情報である。話者の事情を対話形式で聞き手に伝えるために「説明の提供」、「理由・解釈」という機能を持つと多くの先行研究で指摘されている。「のだ」(久野 1973、山口 1975、吉田・李 2020、庵他 2010 など)は一つの代表的な言語形式として頻繁に使われる。以下の例を見

よう。

(4)「最近お金ないなあ。」(再掲)

→(4a)「最近お金ないんだ。」

(5)「生活費が今月かなり厳しいなあ。」(再掲)

→(5a)「生活費が今月かなり厳しいんだ。」

(6)「あー眠い、眠くて死にそうだなあ。明日も仕事早いし最悪。」(再掲)

→(6a)「あー眠い、眠くて死にそうなんだ。明日も仕事早いし最悪。」

例(4a)(5a)(6a)のように、擬似独話「話者の事情(身の回りのこと)-なあ」が対話形式でなされる場合、「なあ」が「のだ」になる。「のだ」は理由・解釈という用法があるため、「のだ」のある発話は話者の事情をより強く説明するように聞こえる。

4.3 「意志形-」による対話形式

「意志形-かな」が対話形式でなされる場合は以下のようになる。

(7)「明日仕事あるしそろそろ寝る準備しようかな。」(再掲)

→(7a)「明日仕事あるしそろそろ寝る準備しよう。」

(8)「最近、出費がすごく多いわーどうしようかな。」(再掲)

→(8a)「最近、出費がすごく多いわーどうしよう。」

例(7)と例(8)において、終助詞「かな」が脱落した例(7a)と(8a)は対話形式になりうる。例(7a)は聞き手がいる場合に発話されると、「一緒に寝る準備をしよう」という勧誘になりうる。また、例(7a)は擬似独話による依頼のほめかしとしても捉えられる。野田(2006)による独話の擬似性の強さの観点からみると、例(7a)は思考や情報処理の過程をそのまま表しているため、擬似性が弱いと言える。「かな」を伴う例(7)は聞き手に認識させようという意図が感じられ、擬似性が中間的と言える。

同様に、例(8a)が終助詞「かな」が脱落した「どうしよう。」は思考や情報処理の過程をそのまま表しているため、擬似性が弱い。一方で、「かな」を伴う例(8)はより聞き手に認識させようという意図が感じられ、擬似性が中間的と言える。

4.4 擬似独話によるほめかしと対話形式によるほめかしの結びつき

擬似独話によるほめかしの表現が、同様の意図をもつ対話形式のほめかし表現に「変

換」されると、聞き手の返答を要求していることが多いため、話し手の要求や依頼を聞き手が察しやすい。一方、「なあ」のつく独話は聞き手に向けたものではないというニュアンスがある(森山 1997)。よって、擬似独話は言語形式上は直接聞き手に伝達せず、聞き手の返答を求めているため、聞き手への返答要求度が低くなり、話し手の要求や依頼を聞き手が察しにくいと言える。

Brown & Levinson (1987)のポライトネス理論によれば、人は誰でも社会生活を営む上で他者との人間関係に関わる基本的欲求を持つ。これがフェイスである。相手のフェイスを脅かす可能性のある行為を総称してフェイス脅かし行為という。人は相手のフェイスをなるべく脅かさないように配慮した言語行動を行う。ポライトネス理論における「フェイス侵害」の観点からみると、「なあ」による擬似独話は聞き手の返答を求めているため、聞き手のフェイス侵害を避けることができるのに対し、対話形式は聞き手の返答を要求していることが多いため、擬似独話ほどにはフェイス侵害を避けていないと考えられる。依頼などの行為要求場面において、直接的な依頼表現をなるべく避ける日本語母語話者は擬似独話を使用している。

5.中国語における擬似独話によるほのめかし

中川(2005)は、日本語は中国語より独り言が多いと述べている。日本語は、常体・敬体や終助詞などにより文形式から独話を識別することが可能であるのに対し、中国語は常体・敬体の区別がなく、独話であるかどうかの判断が難しいが、(日本語の終助詞に相当する)文末の語気詞は中国語で独話を識別する際の手がかりになる。

相原 (2010)では、中国語の語気詞のひとつ“啊”は文末に置かれ、感嘆を表すと記されている。北京・商務印書館・小学館(2006)によれば、“啊”は文末に用いて感嘆の意を表す。または、肯定などの語気を表す。注意を促したり念を押したりするときにも用いる。黎錦熙(2007)によれば、語気詞“啊”は詠嘆的な表現である。以下のような例がある。

(9)他 真 好 啊!

彼 本当に 良い なあ

訳：彼は本当にいい人だなあ。

相原 (2010)

(10)这次 考试 真 难 啊!

今回 試験 すごく 難しい なあ

訳：今回の試験はすごく難しかったな。

北京・商務印書館・小学館(2006)

上の例のように中国語の“啊”は日本語の「なあ」にも対応する場合がある。さらに、文末に語気詞“啊”を付け加えることで、詠嘆表現となり、独り言として用いられることもある。

興味深いのは、この“啊”を文末にもつ中国語の独話が、日本語の「なあ」と同じように、依頼のほめかしとして使われている例が見られることである。すなわち、中国語でも擬似独話として機能しているのである。

(11) 貸したパソコンを返してほしいとき：

“没有 电脑 浑身 难受 啊。”

ない パソコン 全身 つらい なあ

訳：パソコンがなくてとてもつらいなあ。

(c.i. 貸したパソコンを返してください。)

(12) 彼氏にワンピースを買ってほしいとき：

“这条 连衣裙 好好看 啊。”

この ワンピース とても可愛い なあ

訳：このワンピースとてもかわいいなあ。

(c.i. このワンピースを買ってください。)

(13) 貸したお金を返してくれない友達の前で：

“最近 好 穷 啊。”

最近 すごい 貧乏 なあ

訳：最近すごい貧乏だなあ。

(c.i. 貸したお金を返してください。)

(14) 先輩の資料を借りたいとき：

“我 不会 写 啊。我 找 不到 相应 的 资料 啊。”

私 できない 書く なあ。私 探す ない 適切 な 資料 なあ

訳：私書けないし、分からないし、適切な参考資料も見つからないなあ。

(c.i. 先輩の資料を貸してください。)

例(11)～(14)は、“啊”による擬似独話である。このように、中国語においても、擬似独話によるほめかしがあることが分かる。また、上記の例から、中国語の擬似独話においても、「話者の感情/感覚」(例 11、12)及び「話者の事情(身の回りのこと)」(例 13、14)という2種類が見られ、この点でも、日本語の「なあ」を伴う擬似独話と共通している。

6.なぜ擬似独話であることを認知できるのか

人はなぜ独話文を聞いた際に、「純粋な独話」であると捉えるのではなく、なんらかの伝

達の意図を備えた「擬似独話」だと理解するのだろうか。これには Grice (1975)が提唱する協調の原理が深く関わっていると考えられる。人は会話において暗黙のうちに、双方ともに相手の目的を自分も共有しようと努める。Grice (1975)は、会話の参加者には互いに「協調の原理」を遵守するという期待があり、そこから言外の意味ともいえる、発話における含意された意味が生ずると論じている。

「話者の事情(身の回りのこと)」による擬似独話の使用に際して、話し手と聞き手は「協調の原理」を遵守していると考えられる。「協調の原理」の「関連性の原則」に従えば、話し手は関連のあることを話しているはずなので、「私の耳に入るように声に出して、しかも長めの下降調で独り言を言っている。これは、純粋な独話ではなく、何か私に伝えようとしているのではないだろうか」と聞き手は考える。これにより、聞き手は当該の発話を単なる独話と思うのではなく、その裏にある発話意図を読み取ろうとする。このように、人が擬似独話を認知できるのは、Grice (1975)の「協調の原理」と深く関わっていると考えられる。

7.まとめ

本稿では、日本語における擬似独話によるほのめかしの特徴を考察した。擬似独話によるほのめかしには、「話者感情/感覚」及び「話者の事情(身の回りのこと)」を述べるという2種類が見られ、「意志形-かな」によるほのめかしも見られることを指摘した。さらに、擬似独話によるほのめかしと対話形式によるほのめかしの違いを言語形式およびフェイス侵害の観点から論じ、擬似独話によるほのめかしがなぜフェイス侵害を避けるための戦略として使用できるかを明らかにした。さらに、中国語の擬似独話によるほのめかしについても考察し、その言語形式は、語気詞“啊”を伴う現象が見られることを指摘した。そして、当該の語気詞の意味が日本語の「なあ」と類似しているだけでなく、依頼をほのめかす際には、「話者の感情/感覚」や「話者の事情(身の回りのこと)」の2種類がある点でも日本語と共通することを見た。最後に、人が擬似独話を認知できるのは、Grice (1975)の「協調の原理」と深く関わっていると主張をおこなった。今後は日本語と中国語の擬似独話によるほのめかしの相違点と類似点をさらに解明したい。

〈参考文献〉

〈日本語〉

庵功雄他編 (2010)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1993)「依頼表現方略の分析と記述一待遇表現教育への応用に向けて一」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5, pp. 52-69.

久野暉 (1973)『日本文法研究』大修館書店.

- 小池清治 (2002) 『日本語表現・文型事典』朝倉書店.
- 佐治圭三 (1957) 「終助詞の機能」『国語国文』26, pp. 461-469.
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3, pp. 359-374.
- 中川正之 (2005) 『漢語からみえる世界と世間』岩波書店.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部:モダリティ』くろしお出版
- 野田春美 (2006) 「擬似独話が出現するとき」『日本語文法の新地平2 文論編』pp. 193-213.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 三宅知宏 (2000) 「疑念表明の表現について-カナ・カシラを中心に」『鶴見大学紀要第I部 国語・国文学編』第37号, pp. 8-21.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版.
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現』ひつじ書房.
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- 森山卓郎 (1997) 「『独り言』をめぐって-一思考の言語と伝達の言語」『日本語文法体系と方法』pp. 173-188, ひつじ書房.
- 山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」『国文学研究』56, pp. 12-24.
- <中国語>
- 黎锦熙 (2007) 『新著国語文法』湖南教育出版社.
- <英語>
- Brown, P. and S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation." In P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*, pp.41-58. Academic Press.
- Fukushima, S (2000) *Requests and Culture: Politeness in British English and Japanese*. Peter Lang.
- <辞書>
- 相原茂(編) (2010) 『講談社 中日辞典』講談社.
- 北京・商務印書館・小学館(編) (2006) 『中日辞典』小学館.
- <ビデオ資料>
- 西光義弘 (2010) https://www.gengoj.com/seminar/view.php?seminar_list_id=1 (2021年10月29日最終閲覧)

注

- 1 本稿でいう行為要求場面は依頼や要求など、話し手が聞き手に対して、聞き手による何らかの行為を促す場面である。勧誘や命令場面は対象外とする。
- 2 Brown & Levinson (1987)によると、「フェイス」とは人が社会生活を営む上で他者との人間関係を構築するための基本的欲求である。フェイスは「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」に分けられる。ポジティブ・フェイスとは、すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求である。ネガティブ・フェイスとは、すべての「能力ある成人構成員」が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求である。
- 3 佐治(1957)では、「ネ、ヨ、ヤ、エ、イ、サ」を聞き手目当ての終助辞と分類した。森山(1997)は、終助詞や丁寧形式など聞き手目当ての形式がある文は独り言では言えないとしている。
- 4 小池他(2002)は、「なあ」は詠嘆の「な」が強調されて長音化したものとしている。そのため、本稿でいう「なあ」は「な」も含む。また、宮崎(2005)は、独話的文脈で使用され、聞き手目当てではない「ナ」は男女差がないとしたうえで、対話的文脈で使用され、聞き手目当ての「ナ」は男性語的、ぞんざいであると指摘している。本稿は聞き手目当てではない「ナ」を対象とするため、男女差は考察しない。
- 5 本研究の例はすべて筆者が行ったアンケート調査や聞き取り調査によって得られたデータである。